

1. 事業概要

1.1. 本事業に取り組む課題と目的

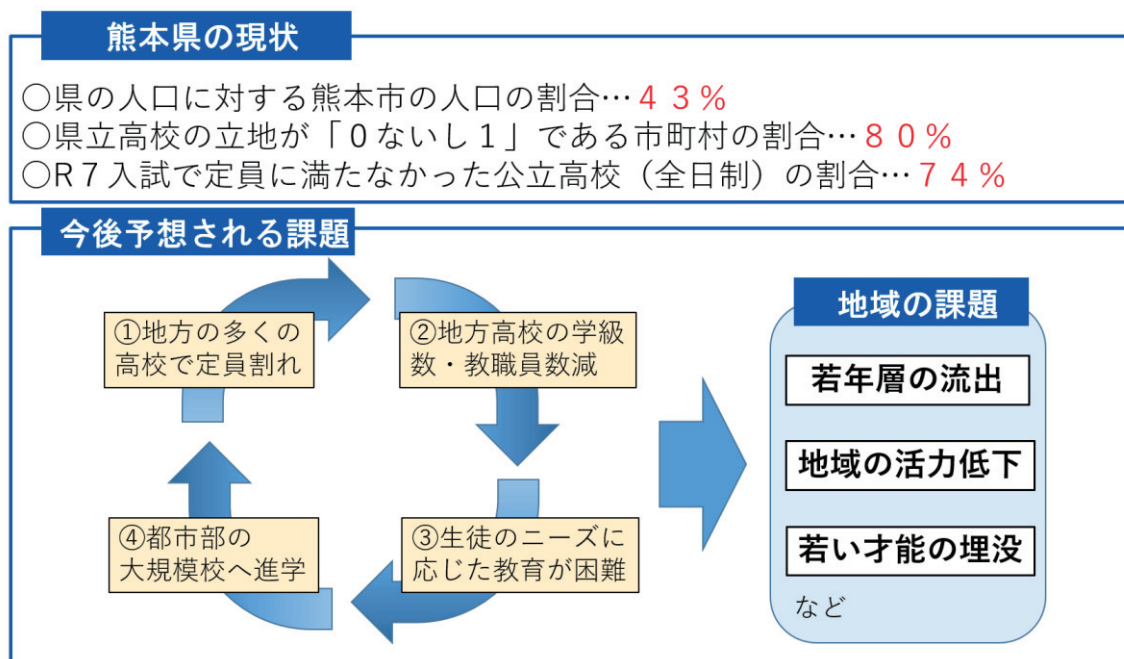
■事業の目的等

(1) 本県の高等学校及び地域を取り巻く現状について

現在、熊本県内では熊本市に一極集中化している傾向が顕著であり、県民の約43%が熊本市民であるという状況である。このような傾向は高校入試の倍率などにも反映されており、地域の高校、そして県内の各地域の将来に深刻な影響を及ぼす問題となっている。

例えば、熊本市外の地域でもきめ細かで丁寧な進路指導が行われているが、中学生が高校を選ぶ際に、大学進学を希望する生徒数などから、切磋琢磨する環境が整っていないと感ずることがある。そのため、一部の生徒は環境を求めて熊本市内の大規模校に進学することもある。さらに、この傾向が続くことで「地元高校から大学進学は難しい」という印象が地域に広まり、その結果、地元の学校から都市部の大学への進学が困難だという考えが広がることで、ますます地域の学校の規模が小さくなり、多様な学びが制限されるという悪循環を生み、若者の地域外への流出は地域の活力低下につながる恐れがあるという声もある。

本県の熊本市外の地域には様々な資源（宝）が存在している。しかし、これらの資源の多くは活用されずに眠っている。新たな資源を見つけ出し、それらを活かして新たな魅力や価値を創造できる人材の育成が求められている。



「地域の高校」として魅力化を図る必要がある

(2) 熊本版COREハイスクール・ネットワークによる取組の必要性

現在、本県では前述のような状況を踏まえ、「第4期熊本県教育振興基本計画」の10の基本的方向性の1つとして、「魅力ある学校づくり」を掲げ、魅力化や新しい時代に対応した学びの充実と地域における持続可能な学校づくりを推進している。その推進の大きな柱として、「ICTを活用した遠隔授業等による教育の充実」が位置づけられている。

令和3年度から5年度まで3年間、国の指定を受けて取り組んだCOREハイスクール・ネットワーク構想では、熊本城に隣接する大規模校の第一高校、県北の山鹿に位置し、教員への「主体的・対話的で深い学び」の実現についての指導助言の役割も担う県立教育センターを中心拠点に、阿蘇(小国)、天草(牛深)、人吉球磨(球磨中央)の受信校で県内全域をカバーする遠隔授業の取組を行ってきた。受信校はいずれも中山間地域に位置しており、それぞれ独自の特色を持っているが、学校規模等から開設科目や教員の専門性に制約がある。令和7年度からは県北の福岡県境に位置する岱志高校も加わり、令和5年度までの3年間の取組を継続・発展させるとともに、令和9年度以降における配信センターの設置を検討し、県内全域にネットワークを拡充する方針で計画を進めている。

さらに、ネットワーク構成校における生徒の主体的・対話的で、多様な学びの実現に向けて、遠隔授業に加え、県一体のネットワークで行う、地域課題の解決を目指した探究的な学び「くまモン(熊本弁で「熊本の人」)プロジェクト」にも取り組んでいる。地域の高校で多様な学びをとおして、生きていく上での強みを発見し、その強みを活かす手立てを考える力は地域活性化のみならず、生徒にとってかけがえのない生きる力となる。都市部の高校への進学者の増加により、地域の高校生の自己肯定感が低下する状況を指摘する声もある中、本事業を通じて、地域の高校で学ぶことが誇りへとつながり、ひいては地域活性化へつながるような熊本の学びを実現したいと考えている。

(3) 熊本版COREハイスクール・ネットワークによる取組の目的・目標

ア 熊本版COREハイスクール・ネットワークによる取組の目的について

前述のとおり、本事業では、「教科・科目充実型」の遠隔授業の充実、学校間連携の運営体制の確立、地域との協働を通じて「多様な学びの中で、地域の資源を発掘し、活かし、地域に貢献できる人材の育成」を実現する。また、「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高校」の実現にも資するものである。

イ 熊本版COREハイスクール・ネットワークによる取組の目標について

本事業による取組の目標は以下①～⑫のとおりである。遠隔授業をとおして実現する多様な学びや、地域課題解決のための探究的な学びをとおして、よりよく課題を解決し、自己の在り方・生き方を考えていくための資質能力の育成を目指す。

【資質・能力の育成】

- ①地域課題等の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、地域課題等の解決に向けた学びの意義や価値を理解するようにする。(知識及び技能)
- ②地域社会や地域の生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を設定し、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)
- ③地域課題解決に向けた取組に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等)

【学校の機能強化・魅力化】

- ④総合的な探究の時間等の探究的な学びを中心とした教育課程の編成と、カリキュラムマネジメントの推進
- ⑤地域住民が参画する教育活動の充実
- ⑥授業改善による「主体的・対話的で深い学び」の実現

【具体的な取組】

- ⑦第一高校(第一高校教諭)や県立教育センター(近隣の県立高校に配置されている教諭等)を主たる中心拠点とした遠隔授業の実施(R7は球磨中央高校も配信のみ)。
- ⑧県内(熊本、阿蘇、天草、人吉球磨、あらたま地域)を一体化した地域課題解決のための探究的な学び(くまモン(熊本の人)プロジェクト)の実施。KSH(熊本スーパーハイスクール)とのリンクによる、探究的な学びの充実。
- ⑨ネットワーク構成校を一体とした、きめ細かな進路指導の実現。地域を越えて切磋琢磨する環境作り。
- ⑩コンソーシアムと学校運営協議会を一体化した地域の拠点としての高校づくり。
- ⑪県立教育センターを主たる中心拠点とした通信教育(教育課程外)の実施。

⑫令和9年度以降における配信センター設置に向けての検討。

①～③の資質・能力の育成は、「予測困難な社会を乗り越える『生きる力』の育成」にもつながるものである。また、「地域の人材育成の拠点、心の拠り所として、なくてはならない高校」の実現に向けて、④～⑥を推進していく。目標の達成状況については、アンケートの実施等によって検証していく。

第一高校の生徒にとっても地方の生徒と交流することで多面的、多角的な視点を身に付け、視野の広い地域に貢献する人材となることが期待される。また、遠隔授業等をとおして、教員間の交流や教材の共有、更に県外の学校との積極的な交流を行うことで、授業改善や指導力向上を図りたい。本事業の成果は県教育委員会等のHPや成果発表会、各種研修等をとおして、県内各校及び県外へ普及を行う。具体的な取組の柱として特に⑦～⑫を推進する。

■熊本版COREハイスクール・ネットワーク事業を構成する高等学校及び選定理由

①熊本県立第一高等学校

選定理由

学年9クラスを有し、1,000名を超える生徒が在籍する大規模校である。普通科、普通科英語コースを設置している。開設科目数も多い。

ほとんどの生徒が大学を始めとした上級学校への進学を希望している。令和7年3月卒業生の進路状況は、卒業者数353人中進学者352人（大学313人、短期大学1人、専修学校等38人）である。

日頃の授業は、生徒たちの上級学校への進学を視野に入れたものであり、学校全体で蓄積された進学指導に関するノウハウを本県全体に普及させ、県の学力向上に寄与したいとの考えから選定した。

②熊本県立小国高等学校

選定理由

阿蘇地方に位置し、大分県に隣接する連携型の中高一貫校である。地域唯一の高等学校であり、地域との協働した教育活動が積極的に展開されている。生徒数が比較的少ないため、開設されている教科や科目も限られている。このことから、多様な学びを求めて熊本市内などの大規模校へ進学を目指す生徒も存在する。令和7年3月卒業生の進路状況は、卒業者数51人中進学者39人（大学22人、短期大学5人、専修学校等12人）である。

国立大学を目指す生徒の育成や、多様な学びが可能であることから、地域

の高校の活性化を促進する可能性を期待し選定した。

③熊本県立牛深高等学校

選定理由

熊本市内から最も遠隔地に位置する高等学校。高校再編整備の一環として、旧牛深高校と河浦高校を統合して、普通総合学科の高校として新たに設立された。地域の生徒の多様なニーズに応えるため、様々な科目が開設されている。しかしながら、生徒数の減少に伴う教員数の問題などから、履修に制約が生じることが課題となっている。令和7年3月卒業生の進路状況は、卒業生数28人中進学者15人（大学5人、短期大学1人、専修学校等9人）である。

地域の学校における多様な科目の開設の在り方を研究する目的で、構成校に選定した。

④熊本県立球磨中央高等学校

選定理由

人吉球磨地区の高校再編整備によって新たな学校として発足した。普通科としての「地域未来探究科」が設置され、全校生徒を対象とした「球磨地域学」や公民科の学校設定科目である「GLS（グローバル・スタディーズ）」等、地域と連携した特色ある学びを行っている。また、商業科、情報処理科ではビジネスの専門知識や技術の習得、各種検定資格を取得し、日本経済や地域社会に貢献する人材を多数輩出している。令和7年3月卒業生の進路状況は、卒業生数91人中進学者54人（大学14人、短期大学2人、専修学校等38人）である。

今後、普通科を中心に探究科目で学んだ生徒が、大学進学や公務員などの幅広い進路を目指すための多様な科目の開設が求められる。地域の総合高校として、進学対応を目的とした遠隔科目開設の調査研究を行いたいと考え、構成校に選定した。

⑤熊本県立教育センター

選定理由

熊本県における教育の充実及び振興を図るための研修、調査研究の拠点として、本事業構成校に対する指導助言を行う。また、その成果の普及を行う。

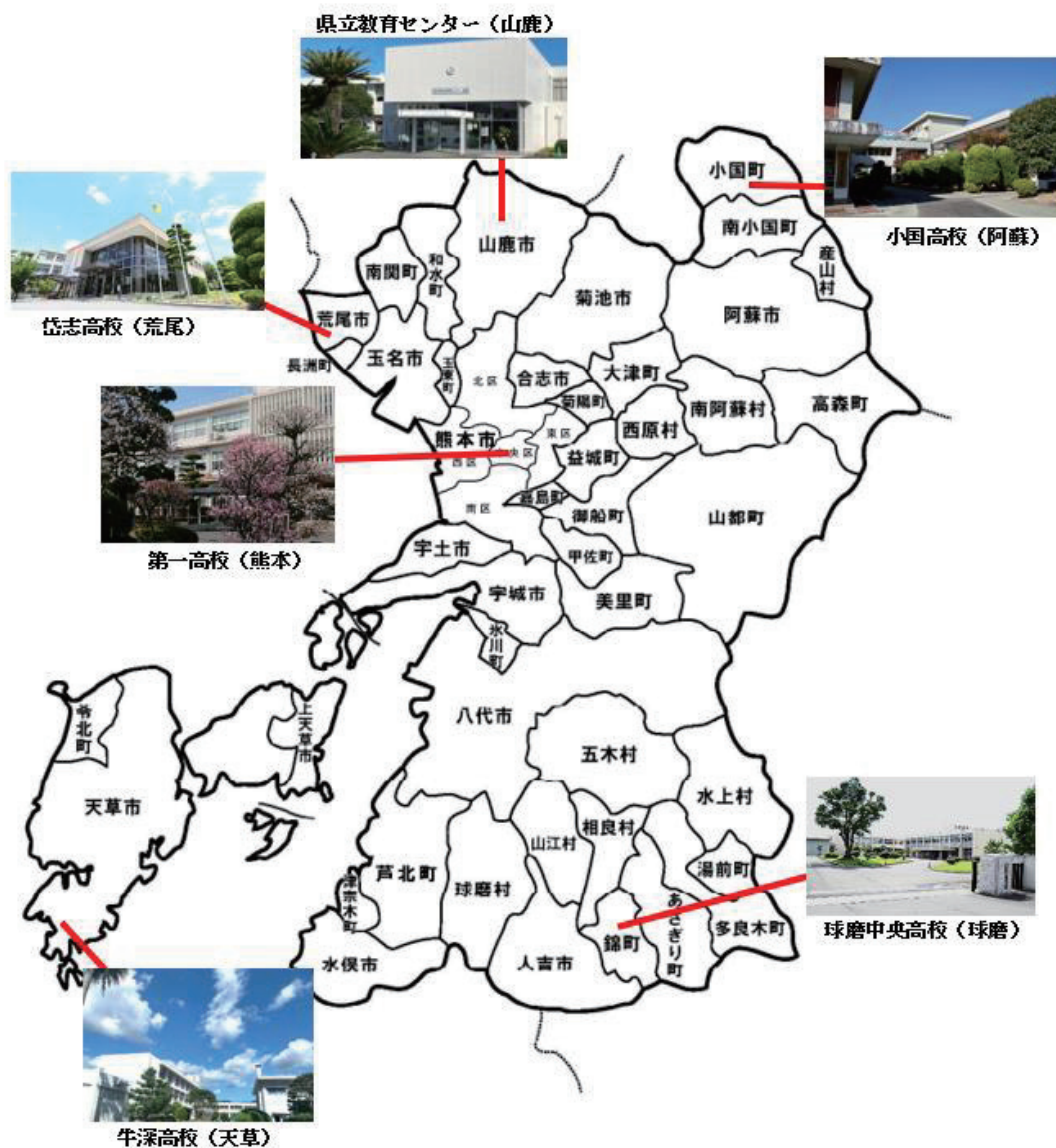
さらに、遠隔授業の配信拠点の一つとして、通信教育の実施や配信センター設置に向けての整備、教職員の指導力向上に寄与するために選定した。

⑥熊本県立岱志高等学校

選定理由

福岡県との県境（荒尾市）に位置し、公共交通機関の利便性が高いため、玉名市内や熊本市内、福岡県内へ通学する生徒が多いという地域特有の課題がある。令和7年3月卒業生の進路状況は、卒業生数25人中進学者16人（大学6人、短期大学1人、専修学校等9人）である。

同校は普通科にアドバンスト、キャリア、スポーツ、美術工芸の4つのコースを設置して、生徒の多岐にわたる進路希望の実現に取り組んでいる。これらの多様化したニーズに応えるために、遠隔授業による「教科・科目充実型」の学びを提供することが有益であると判断し、令和7年度より新たに選定した。



■実施日程

月	実施内容
令和7年 4月	C I O（遠隔授業コーディネーター）の任用 県立教育センター配信の「情報探究」の授業訪問 各高校コンソーシアム委員への依頼 熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク連絡協議会
5月	各高校コンソーシアム委員への委嘱 運営指導委員への依頼 対面授業実施日調査
6月	運営指導委員への委嘱
7月	各高校へオンライン夏季集中講座の募集開始
8月	県立教育センターよりオンライン夏季集中講座開講
9月	熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業に係る次年度の受信希望教科・科目調査
10月	八代高校配信の「発展英語」の授業訪問 小国高校受信の「発展英語」の授業訪問 第1回運営指導委員会
11月	県立教育センター及び牛深高校における公開授業（オンライン）の実施
12月	熊本スーパーハイスクール（K S H）全体発表会「県立高校学びの祭典」 各高校へオンライン冬季集中講座の募集開始 オンライン冬季集中講座開講
令和8年 1月	受信校生徒への遠隔授業アンケート調査
2月	第2回運営指導委員会 兼「くまモンプロジェクト」生徒成果発表会
3月	報告書刊行

1.2. 本事業を通して明らかにしたい事項

■遠隔授業

「遠隔授業に係る主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」

1.1.で前述したように、熊本県では、地域においても丁寧な進路指導が行われているが、大学進学希望者数等から、切磋琢磨する環境が整わない等の課題を抱えている。結果的に大学進学を目指す生徒たちは、進路実績があり、同じ目的を持った生徒が多く通う熊本市内の大規模校に進学する傾向にある。

このような課題がある中で、本県では学校間連携で以下のように様々な遠隔授業を実施している。遠隔授業をとおして、課題解決の手法を得たいと考えている。

○本県で実施している多様な配信方式による学校間連携型遠隔授業について

・熊本市内の大規模校→地域の小規模校への配信

（配信側・受信側双方で生徒が受講）

第一高校（配信）→小国高校（受信）

・地方の中規模校→地域の小規模校への配信

（配信側・受信側双方で生徒が受講）

球磨中央高校→小国高校

（ST（スーパーティーチャー：指導教諭）による配信）

・指導教諭の所属する学校→地域の小規模校への配信

（受信校のみで生徒が受講。八代高校は本県における熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業のネットワーク構成校ではないが、同校に所属する ST（スーパーティーチャー：指導教諭）は高い授業力を有し、小規模校における大学進学者向けの授業を確実に行えること、そして、ST の授業を受信校の同教科の教員が見ることで、教員の学びの場を創出できることを期待し、活用したものの。）

八代高校→小国高校

・県立教育センター→地域の小規模校への配信

（受信校のみで生徒が受講。教育センター近隣の鹿本高校教諭が教育センターに出向いて授業配信）

(1) 遠隔授業受講者の大学進学率の向上

	5年度（実績）	6年度	7年度
目標値		40%	45%
実績値	36.6%（15/41人）	37.5%（6/16人）	47.8% （11/23人）

遠隔授業における質の高い教育を実践することにより、遠隔授業を受講した生徒の学習意欲の向上や学力向上につながり、大学進学率も向上すると考える。遠隔授業受講者の大学進学率の向上は、地域の小規模校からも大学進学することができるという進路選択の幅を広げ、地域の学校の魅力化にもつながると考える。

(2) 成果発表会（公開授業を含む）等の開催による遠隔授業の普及促進

遠隔授業に係る成果発表会（公開授業を含む）に参加した高校（他県管理機関等含む）の数

	5年度（実績）	6年度	7年度
目標値		20	35
実績値	0	15	9

遠隔授業の実施は、特定の教員に限定されるものではなく、今後の教員が持つべき資質や能力の一つとして位置付けられている。そのため、経験年数や勤務校によらず、遠隔授業に携わるための体制整備を模索している。遠隔授業の普及促進のため成果発表会（公開授業を含む）を開催したり、教員向けの協議会などを行うことにより、必要な手法や情報を県内の全ての教員に周知・共有していきたいと考える。

(3) 学校間連携型の遠隔授業におけるネットワーク構成校数及び遠隔授業の実施教科・科目の拡充

学校間連携型の遠隔授業において、配信校と受信校における時程や行事日程の調整、教育課程の編成についてなど、構成校の負担は依然として重いのが実情である。自走化に向け、配信センターの設置が急務であり、令和9年度からの運用に向けて計画を進める。一方、学校間連携をとおした遠隔授業や探究的な学びによって、生徒同士の新たなコミュニケーションの場が創出されたり、相互の学習意欲向上、進路選択の幅を広げるなど、生徒にとって大きな学びにつながっている面も見逃すことはできない。配信センターを拠点として、地域で多様な教科・科目を学ぶ遠隔授業の実施に向けて進めてい

校間連携型の良さも残しながら事業を行っていくことが可能かについても検討を重ね、ネットワーク構成校数及び遠隔授業の実施教科・科目の拡充について、学校及び生徒の多様な学習ニーズを確認しながら対応していく。

■通信教育

「県内各地の生徒の多様な学習ニーズに応えることができる通信教育の体制構築に向けて」

本県にとって、遠隔授業や通信教育を定着させるためには、配信センターの設置が急務である。中山間地域の県立高校の充足率の低下が進む中、遠隔授業や通信教育によって、各地域で多様な教科・科目が学べることは、学校の魅力化にもつながり、ひいては地域の活性化にもつながる。

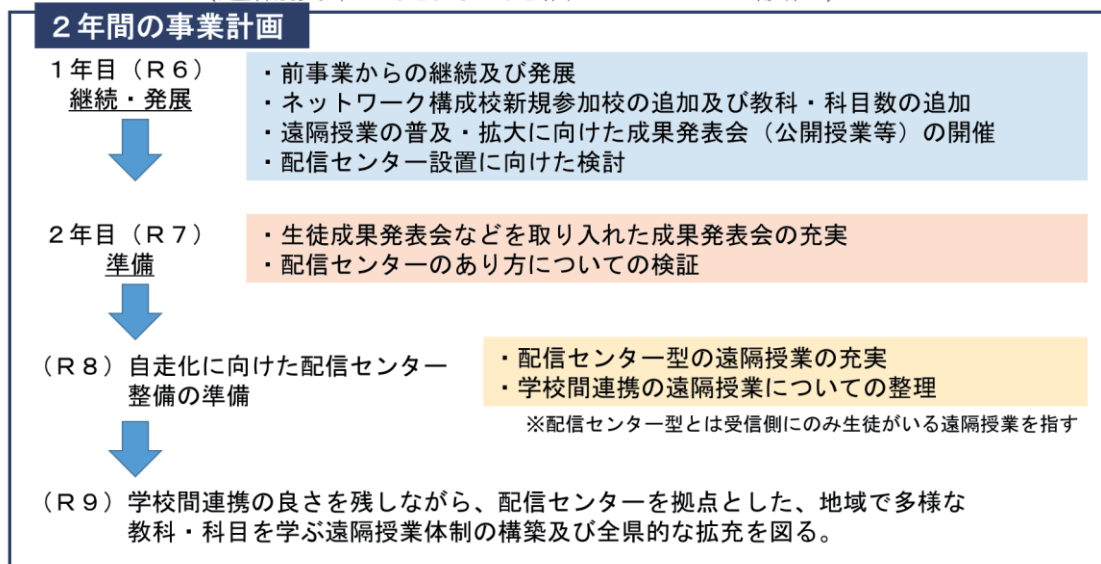
令和 9 年度以降の配信センター設置の検討を進めており、配信センターを中心拠点とした通信教育のあり方についても検討を行っている段階である。

今年度の通信教育に関する取組として、遠隔授業及び通信教育の普及発展のため、長期休業中に、県立高校の希望する全ての 2 年生の生徒を対象にし、集中講座を教育課程外で実施した。集中講座実施後には検証を重ね、集中講座の科目数や実施形態等について、本県における通信教育のさらなる可能性について検討する。令和 9 年度から配信センターの運用を開始すると同時に、通信教育についても中心拠点を配信センターに位置づけた体制を構築する。

1.3. ロードマップ

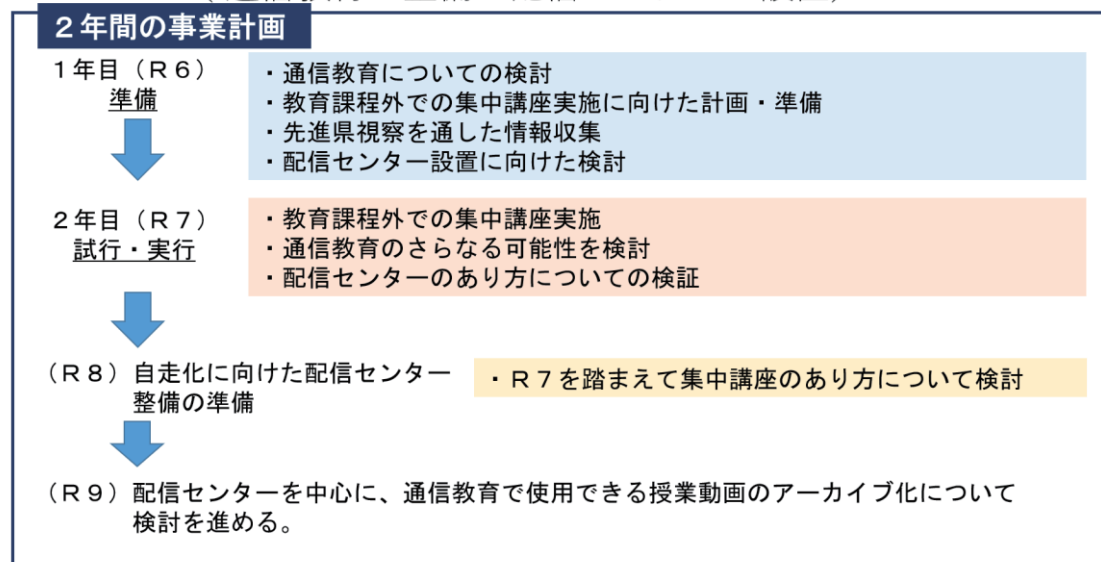
■遠隔授業について

事業の概要と計画 (遠隔授業の充実・配信センターの設置)



■通信教育について

事業の概要と計画 (通信教育の整備・配信センターの設置)



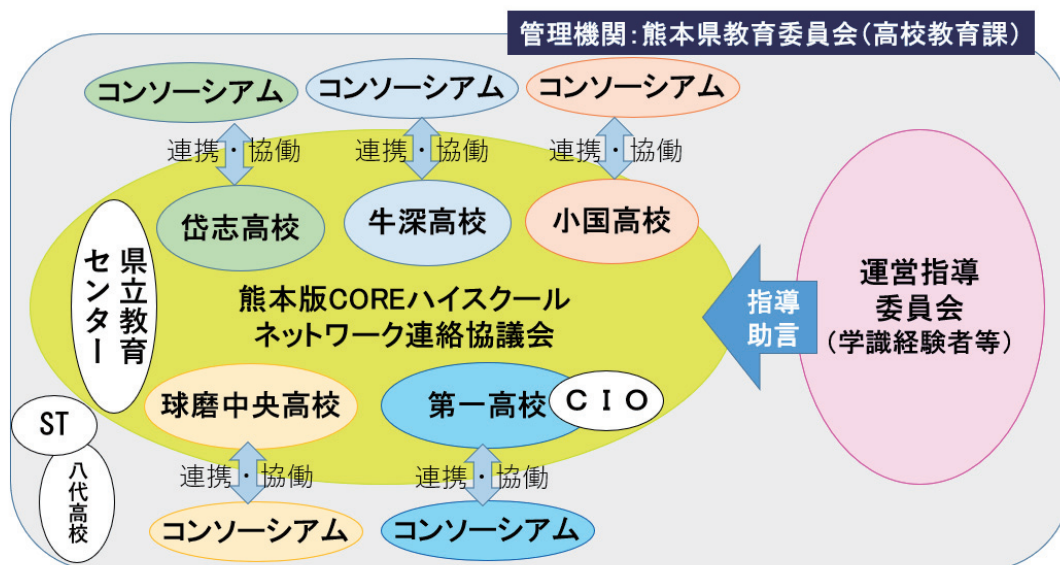
2. 遠隔授業の実施やその運営体制に関する取組

2.1. 調査計画

■実施日程（遠隔授業）

月	実施内容
令和7年 4月	C I O（遠隔授業コーディネーター）の任用 県立教育センター配信の「情報探究」の授業訪問 各高校コンソーシアム委員への依頼 熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク連絡協議会
5月	各高校コンソーシアム委員への委嘱 運営指導委員への依頼 対面授業実施日調査
6月	運営指導委員への委嘱
7月	
8月	
9月	熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業に係る次年度の受信希望教科・科目調査
10月	八代高校配信の「発展英語」の授業訪問 小国高校受信の「発展英語」の授業訪問 第1回運営指導委員会
11月	県立教育センター及び牛深高校における公開授業（オンライン）の実施
12月	熊本スーパーハイスクール（K S H）全体発表会「県立高校学びの祭典」
令和8年 1月	受信校生徒への遠隔授業アンケート調査
2月	第2回運営指導委員会 兼「くまモンプロジェクト」生徒成果発表会
3月	報告書刊行

2.2. 実施体制



円滑な調整に資する業務運営を行うため、運営体制を図のように継続させた。

(1) 熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク連絡協議会

本事業の管理機能を高校教育課内に置くとともに、高校教育課、県立教育センター、ネットワーク構成校の代表者が集まる「熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク連絡協議会」を運営体制の中心として位置づけた。連絡協議会にはネットワーク構成校の管理職及び担当者が参加し、遠隔授業及び地域と連携・協働した探究的な学びの実施に向けて、教育課程等の共通化や日課の調整等の体制づくり、年間を通じた成果と課題の共有を中心に協議を行った。

(2) 運営指導委員会

事業運営に関し、専門的見地から指導・助言、評価を行う機関として運営指導委員会を位置づけた。遠隔授業や学習評価及び地域と学校のあり方に知見のある大学教授等で構成し、指導・助言をいただいた。

【熊本県教育委員会熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業
運営指導委員】

- ・熊本大学大学院教育学研究科 教授 田口浩継 氏
- ・岐阜大学教育学部 教授 益子典文 氏
- ・崇城大学情報学部 教授 星合隆成 氏
- ・熊本大学大学院先端科学研究部 准教授 田中尚人 氏

- ・島根大学大学教育センター 准教授 中村怜詞 氏
- ・地域・教育魅力化プラットフォーム 長谷川勇紀 氏

(3) コンソーシアム

県立教育センターを除くネットワーク構成校（第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校、岱志高校）において、学校運営協議会を母体とするコンソーシアムや地域の課題や特性について多角的視点から助言を行うメンバーで構成したコンソーシアムを設置するなど、高校と地域とが連携・協働し、地域を生かした探究的な学びを推進する体制を位置づけた。

(4) 遠隔授業コーディネーター（CIO）

CIOについては、本県では「遠隔授業コーディネーター」と称し、本事業においては、令和6年6月1日より任用を行い、主たる配信校である第一高校に配置した。遠隔授業での効果的な教育方法の研究・開発や遠隔授業システムの構築・保守・管理が主な役割である。令和7年度については、オンラインによる長期休業中の集中講座の運営にも参加。また、HDコムを用いない新たな形態での授業配信の方法についても研究した。

- ・遠隔授業コーディネーター 松田伊津子 氏

(5) その他

管理機関からネットワーク構成校への連絡、ネットワーク構成校同士の連絡等については、Google Classroom（以下 Classroom）を利用した。

探究的な学び（くまモンプロジェクト）用の Classroom と遠隔授業用の Classroom を作成した。探究的な学び用の Classroom は生徒が参加できるものであり、構成校同士の生徒が連絡を取り合い、探究的な学びを進める連絡ツールとしての役割を期待した。しかし生徒間の活発な利用の場としては機能しなかったため、運営方法について検討が必要である。

2.3. 取組概要

- 令和7年 4月 C I O（遠隔授業コーディネーター）の任用
県立教育センター配信の「情報探究」の授業訪問
各高校コンソーシアム委員への依頼
熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク連絡協議会
- 令和7年 5月 各高校コンソーシアム委員への委嘱
運営指導委員への依頼
対面授業実施日調査
- 令和7年 6月 運営指導委員への委嘱
- 令和7年 9月 熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業に係る次年度の受信希望教科・科目調査
- 令和7年10月 八代高校配信の「発展英語」の授業訪問
小国高校受信の「発展英語」の授業訪問
第1回運営指導委員会
- 令和7年11月 県立教育センター及び牛深高校における公開授業（オンライン）の実施
- 令和7年12月 熊本スーパーハイスクール（KSH）全体発表会「県立高校学びの祭典」
- 令和8年 1月 受信校生徒への遠隔授業アンケート調査
- 令和8年 2月 第2回運営指導委員会 兼「くまモンプロジェクト」生徒成果発表会
- 令和8年 3月 報告書刊行

昨年度に引き続き、今年度も以下のように、受信希望教科・科目調査をネットワーク構成校に対して行った。その内容を踏まえ、関係各課とやり取りを行い、R8の科目を決定した。

令和8年度(2026年度)熊本版CORE事業 受信希望教科・科目調査表

所属名	高校教育課	回答日	令和7年(2025年)9月 日
担当者		所属名	
電話番号		電話番号	
E-mail		E-mail	

※提出締切 令和7年(2025年)9月19日(金)
※随文は必要ありません。

○令和8年度(2026年度)の受信希望教科・科目について
受信を希望する教科・科目を記入してください。
配受信の関係で、希望に沿えないこともあります。

受信希望教科・科目1

教科名	
科目名	
継続・新規の別	継続 ・ 新規
開設学年	
単位数	
必修・選択の別	必修 ・ 選択
選択者の 予定人数	人 (分かる範囲で記入してください)
選定している教科書	
要望など	

受信希望教科・科目2

教科名	
科目名	
継続・新規の別	継続 ・ 新規
開設学年	
単位数	
必修・選択の別	必修 ・ 選択
選択者の 予定人数	人 (分かる範囲で記入してください)
選定している教科書	
要望など	

受信希望教科・科目3

教科名	
科目名	
継続・新規の別	継続 ・ 新規
開設学年	
単位数	
必修・選択の別	必修 ・ 選択
選択者の 予定人数	人 (分かる範囲で記入してください)
選定している教科書	
要望など	

受信希望教科・科目4

教科名	
科目名	
継続・新規の別	継続 ・ 新規
開設学年	
単位数	
必修・選択の別	必修 ・ 選択
選択者の 予定人数	人 (分かる範囲で記入してください)
選定している教科書	
要望など	

※継続・新規の別、必修・選択の別欄は当てはまるものに○をつけてください。
※記入欄が不足する場合は、適宜追加をお願いします。

2.3.1. 遠隔授業実施表

配信拠点	受信校	教科名	科目	教育課程	開設学年	遠隔授業実施理由	受信側の配置体制	遠隔授業実施回数/全授業回数
第一高校	小国高校	数学	数学B	内	3学年	習熟度	教員（専門科目）	30/52
第一高校	小国高校	数学	実践文系 数学	内	3学年	習熟度	教員（専門科目）	51/76
球磨中央高校	小国高校	商業	マーケティング	内	3学年	選択科目	教員	40/44
県立教育センター	牛深高校	情報	情報探究	内	3学年	選択科目	教員	23/28
八代高校(ST)	小国高校	外国語	発展英語	内	3学年	習熟度	教員	41/51

2.4. 取組内容

令和7年度は令和6年度を踏襲する形の運営体制で実施した。本年度新たに開設した県立教育センターから牛深高校の情報探究の遠隔授業においては、授業者に県立教育センター近隣の高校である鹿本高校の教諭を充てた。配信センター設置へ向けた研究の一環として、近隣校所属の教諭を派遣する形式を採用した。

学校間連携の課題として残ったことは、それぞれの学校における行事や突発的な日課の変更による授業変更の連絡が、授業者の負担となっていることである。遠隔授業開始当初からの課題であるが、依然として大きな課題として残った。今後は受信側のみに生徒がいる配信センター型の遠隔授業にシフトしていくことにより、日課変更の負担は大きく低減すると考えられる。

令和7年度に行なった遠隔授業に関する取組として、以下の五つについてまとめた。一つ目は、現在本県において配受信を行う際に使用しているビデオ会議システム「HD コム（パナソニック製）」を用いない形での遠隔授業のあり方に関する遠隔授業コーディネーターの知見について、二つ目は、令和7年度に実施した科目の概要について、三つ目は、今年度遠隔授業の普及啓発を目的に行った公開授業について、四つ目は、運営指導委員会のまとめについて、最後に地域課題解決に向けた探究的な学び（くまモンプロジェクト）について紹介する。

（1）遠隔授業コーディネーターによる知見のまとめ

C I Oについて、本県では「遠隔授業コーディネーター」と称し、主たる配信校である第一高校に配置している。今後 HD コムのシステムを用いない授業配信事例も生じると考えられることから、「分かりやすいマニュアルがあれば、より効果的に遠隔授業を行うことができるのではないか」という考えのもと作成した。

【HD コムのネットワークの設定と確認】

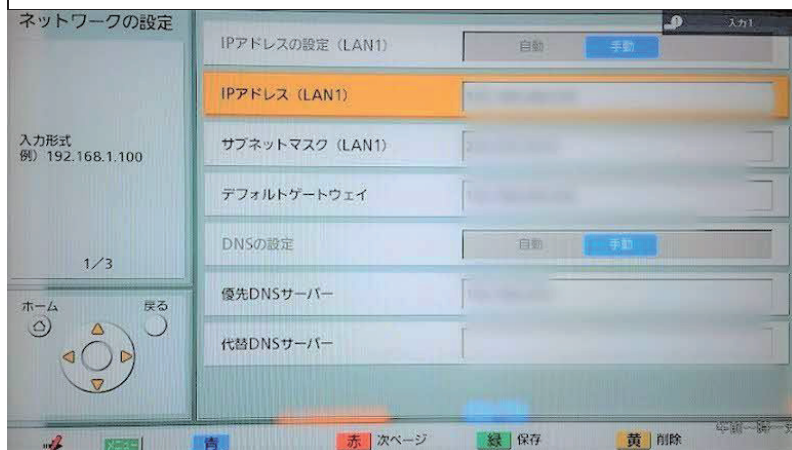
HD コムで通信できない

- ・主に利用しているルーターが変更となり、使用する IP アドレスの変更が発生する場合は、HD コムで使っている IP アドレスを回線変更に伴い変更する必要がある。
- ・特に IP アドレス周りの変更がないのであれば、HD コム側の設定の問題ではなく、LAN 配線等を含めた接続や、利用している回線/ルーター側で何かし

らの問題が発生している可能性がある。

ネットワークの設定

「メニュー」→「設定/保守をする」→「ネットワークの設定」

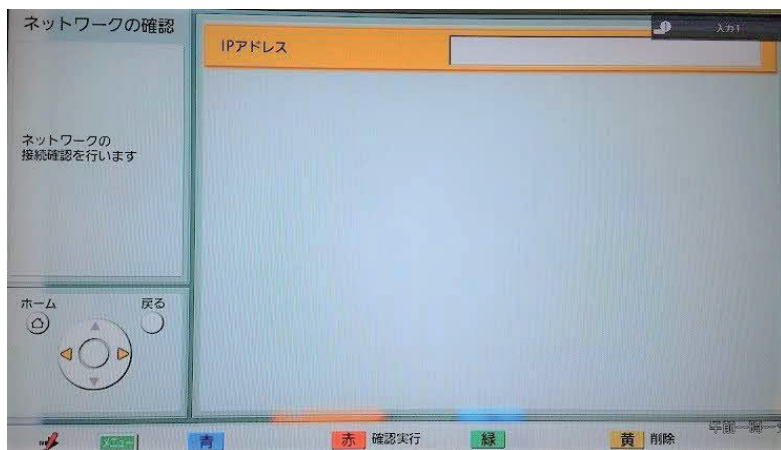


ネットワークの確認

HD コムから利用するルーターまでの疎通が通るかどうかを確認する方法。

「メニュー」→「設定/保守をする」→「ネットワークの確認」

(ルーターの) IP アドレスを入力



HD コムに設定されている「デフォルトゲートウェイ」(＝一般的に自拠点のルーターのIPアドレス)に対して「ネットワークの確認」をし、「成功」となるようなら、HD コム～ルーター間の疎通

は出来ている。この場合 HD コムの設定変更は不要で、繋がらない場合はルーターから上位側での通信の問題が発生していると考えられる。

HD コムの専用カメラとマイクを使用して Google Meet 配信

高校2年生を対象にしたスーパーティーチャーによる集中講座の様子。

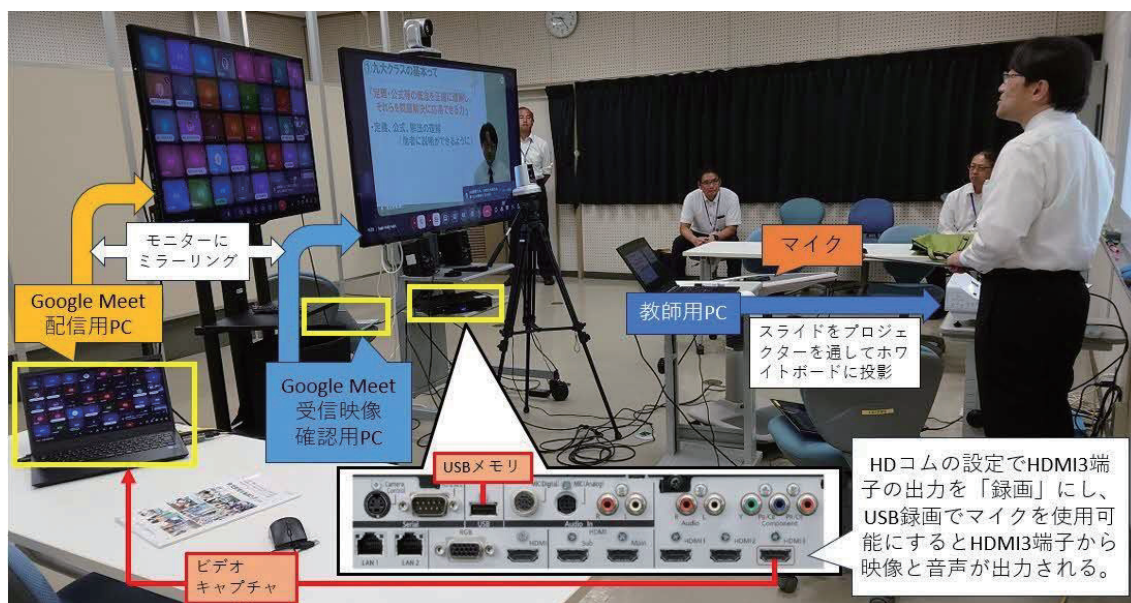


令和7年8月1日(金)【英語】

講義担当者：八代高校 指導教諭

ホワイトボードにスライド映像を投影。HD コムのカメラ映像を、ビデオキャプチャーを通してPCに入力し、Google Meetで配信。配信用PCの映像を大型提示装置にミラーリングし、受講者の反応を見る。

(Google Meet 機能の「挙手」で反応を見ることが出来た。)



令和7年8月5日(火)【数学】講義担当者：済々黌高校 指導教諭

カメラ映像に大きなずれがあったので、生徒が見ている Google Meet の映像を教師が直接確認できるように受信映像確認用 PC を大型提示装置にミラーリングした。

HDMI3 端子の設定

「メニュー」→黄ボタンで管理者ログイン「(初期設定) 0 0 0 0 0 0 0 0」
→「映像出力の設定」→「HDMI3 の出力」→(出力したい映像の)「録画」に
設定→緑ボタンで保存
USB 録画…「メニュー」→「設定/保守をする」→「USB 録画の設定」→
「USB 録画」

USB 録画をすれば HD コムの専用マイクが使用できる。その他のマイクの音声を直接配信用 PC に入力する場合は USB 録画をする必要はない。

※HD コム専用マイクは、HD コムで通信をしていない状態では「手元ノイズ抑圧」機能が上手く働かない可能性あり。室内に教師 1 人の場合はあまり問題ないが、生徒が入る場合などは雑音が響く可能性がある。

Google Meet で行う遠隔授業 ※令和 7 年現在 (Google Meet は常に仕様変更あり)

会議の立ち上げ…「会議コード取得」または「クラスルームでリンクを生成」

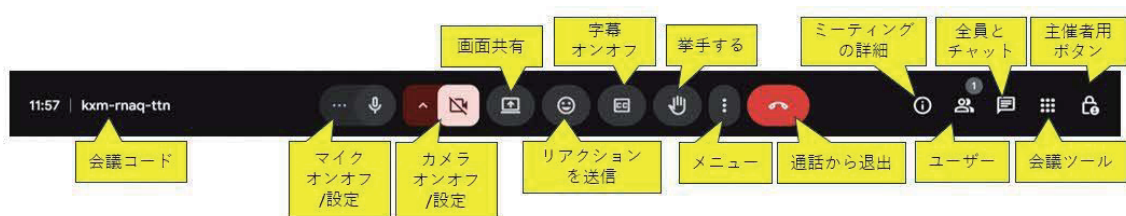
- ・会議コード取得

Google Meet にアクセス「新しい会議を作成」→「次回以降の会議を作成」
URL または 10 桁の会議コードを生徒と共有。(使いまわし可能)

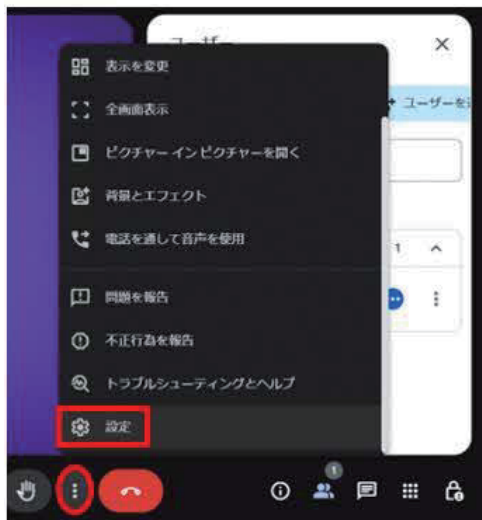
- ・Google Classroom でリンクを生成

Google Classroom のトップページを開き、左の Meet 枠にある「リンクを生成」ボタンをクリック。→「生徒に表示」のスイッチが ON になっていることを確認→保存→「参加」ボタンが表示される。

Google Meet のボタンについて



- ・出席確認…「ユーザー」に参加者一覧が表示される。
- ・通信の負荷が大きすぎる場合はカメラをオフ。生徒のマイクは基本的にオフ。
- ・生徒は「挙手」ボタンで発言の意思を表示。マイクをオンにして発言。



・チャットでコミュニケーション。…質問など、教師がタイミングの良い時に拾う。不適切なチャットがある場合は制限できる。→主催者が右下の詳細メニューからチャット機能をオンオフできる。

主催者は、参加者のチャット送信を許可しない設定も可能。

←3点アイコンのメニューからレイアウト変更、全画面表示、ピクチャーインピクチャー、マイク・カメラ・スピーカーの設定等の設定等

ピクチャーインピクチャー…Google Meet の画面を小さく表示したまま他の操作ができる。自由に移動可能。

マイクの設定

マイクを選択

マイクに向かって話しかけたとき、波形が変化すればマイクは正常に機能している。

スピーカーを選択

Push-to-Talk機能オンにすると、スペースキーを長押しすることで押し続けている間だけマイクをオンにできる。発言時だけマイクをオンにしたい場合に便利。

クリックしてテスト音が再生されればスピーカーは正常に機能している。

USBデバイスの物理ボタン操作とGoogle Meetのビデオ会議画面上の操作を同期させる機能。

※マイクとカメラの許可…ブラウザでアドレスバーの左にある「鍵マーク」からカメラとマイクの項を許可。

音が聞こえない場合

- ・デバイスの音量確認。・マイク、スピーカーの設定を確認。
- ・マイクジャックの挿し込み確認。など

マイクの反響音を無くす

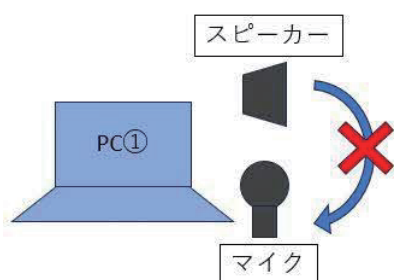
〈ハウリングのメカニズム〉

マイク→音響機器→音声が増幅→スピーカーから出た音を再度マイクが拾う

→ループ現象

〈ハウリングの主な原因〉

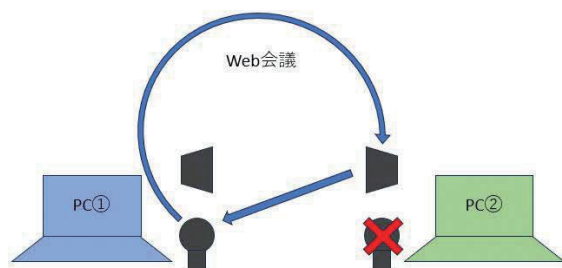
- ・マイク、スピーカーの音量が大きい、または距離が近い。
- ・周辺環境のノイズ（車の音やエアコンの音、会議室の壁に音が反響する）
- ・同じ空間で複数のデバイスを使用。



最近のデバイスではエコーキャンセル機能があり、1台でハウリングすることはあまりない。
※エコーキャンセル機能…自分のスピーカーから出た音がマイクに回り込むのを防ぐ。



同じ空間で複数のデバイスがWeb会議に参加するとPC①のスピーカーから出た音をPC②のマイクが拾い、Web会議を通してまたPC①のスピーカーから出る、などのループ現象が起こる。



PC②のマイクをミュートにしても、PC②のスピーカーから出る音をPC①のマイクが拾ってしまうことがある。
対策⇒PC②のマイクとスピーカーをオフにする。

〈ハウリングの対策〉

- ・マイクとスピーカーの音量を調整。マイクとスピーカーの距離を離す（目安1 m以上）または向きを変える。イヤホンを使用する。発信時以外はマイクをミュートにする。

- ・同じ部屋で参加しない。

同じ部屋で複数参加者がいる場合は、1 人だけがマイクとスピーカーを使い、他の参加者はマイクとスピーカーをオフにするか、コンパニオンモードを利用。

※コンパニオンモード…マイク、カメラ、スピーカーが自動的にオフになるのでハウリングすることなくスムーズにテレビ会議に参加できる。画面共有、チャット、挙手などができる。

例 会議室では大画面モニターやマイク、スピーカーを使用。自分の PC はチャットや画面共有の操作に集中する。

- ・エコーキャンセル機能付き web 会議用マイクスピーカー（スピーカーフォン）を使う。
- ・部屋の壁などに音が反響する…部屋を移動するか吸音性のある素材（カーテン等）を設置。
- ・アダプティブオーディオ機能…エコーやハウリングを防ぐためにデバイスの音声を自動で統合。（有料機能）
- ・ノイズキャンセリング機能…音声の設定でノイズキャンセルをオン。（有料機能）

カメラの設定



解像度のデフォルト設定（自動）は、帯域幅（通信速度）に応じて自動調整される。十分な帯域幅があれば 720p（HD 画質）で表示されるが、ネットワークが不安定な場合はそれ以下の画質に自動で切り替わる。

高解像度にするためのポイント

- ・十分な帯域幅が必要。インターネット環境が安定しているか。
- ・高解像度に対応したカメラと十分な性能のデバイスが必要。
- ・動画の設定で「送信時の解像度」と「受信時の解像度」を高解像度に設定。

フル HD（1080p）解像度はデフォルトでオフとなっており、各ユーザーが会議の参加前に有効化する必要がある。

解像度を上げるほど映像が鮮明になるが、インターネット回線の負荷が高まる。帯域幅が不足している場合は Google Meet が自動的に低い解像度に調整する。

3 人以上の場合、フル HD での映像送信は、受信側がフル HD 表示に十分なディスプレイで送信ユーザーをピン留めした場合行われる。

レイアウト変更

3点アイコンから「レイアウトを変更（表示を変更）」を選択



自動（デフォルト）…参加者の人数に応じて画面表示を自動で選択する。発言中の参加者や共有画面を大きくしつつ、他の参加者をタイルで表示する。

タイル表示…参加者の画像をグリッド状に等しく表示する。スライダーで表示するタイル数を調整できる。（最大49人）


スポットライト…発言中の参加者や共有画面が画面全体に大きく表示される。一人の発言に焦点を当てたい場合に便利。※自分のタイルが邪魔な場合、タイルにカーソルを合わせて3点アイコンから「最小化」を選ぶなど。

サイドバー…発言中の参加者や共有画面が大きく表示され、その横に他の参加者が縦に表示される。

※レイアウトによって映像の見える幅や高さが変化するので、授業前、受信側にレイアウトを指定（スポットライトやサイドバーがおすすめ）しておくとうわかりやすい。


ピン留め機能

・参加者や共有画面

参加者や共有画面を固定する。（常に大きく表示させる目的。）主催者・共同主催者は、特定のタイルを3つまで全参加者に対して固定できる。映像タイル上にカーソルを合わせ、表示されるピンアイコン  をクリックすることで可能。

※共同主催者…主催者は会議中に「ユーザー」参加者の横にある3点アイコンから「主催者の権限を付与」できる。

・チャットメッセージ

リンク付きのメッセージなど、参加者全員に共有するチャットメッセージを固定する。固定したいチャットメッセージにカーソルを合わせ、右上に表示されるピンアイコン  をクリックすることで可能。後から入室した参加者にも表示される。

全画面表示

3点アイコンから「全画面表示」を選択。終了時も同様。（自映像画面ダブルクリックで出来る場合も）

画面共有



※Google Meet の3点アイコンから「ピクチャーインピクチャー」を開いておくと Google Meet の画面を確認しながら作業ができて便利。

ウィンドウ…現時点で立ち上がっている特定のウィンドウのみが単体で表示される。PowerPoint など特定のアプリケーションのみ共有する場合。

タブ…Google Chrome で立ち上がっているタブ単体を共有。 Google スライドや特定のウェブサイトを見せる場合等。そのタブの音声もデフォルトで共有されるので動画の共有に向いている。 動画ファイルはクロームタブにドラッグ&ドロップすれば再生できる。

※再生できる動画ファイル形式…MP4、WEBM、MOV、OGG、AVI、MKV など。その他、画像ファイル（JPG、PNG、GIF など）や音声ファイル（MP3、WAV など）も再生可能。

デスクトップ（あなたの全画面）…デスクトップに表示されている画面がそのまま共有される。 複数のファイルやソフトを使用して説明するときには便利だが、全体が映ってしまうので注意が必要。

共有資料を拡大

〈受信側〉

- ・共有されている画面の右下に表示されるズームアイコンから拡大・縮小が可能。
- ・レイアウトを変更する…「スポットライト」や「サイドバー」で大きく表示できる。

〈送信側〉

- ・ 全画面表示にする。(PowerPoint や Google スライドの資料はあらかじめスライドショーモードで開いておくなど。)
- ・ アプリケーション内で拡大 (ピンチアウト)。

動画共有

- ① Google Chrome タブで動画を再生する準備をする。(全画面表示にしておく。)
〈動画サイトの場合〉動画を開く。
〈動画ファイルの場合〉 Google Chrome タブにドラッグ&ドロップしておく。
- ② Google Meet の画面共有で「タブ」を選択。
「音声を共有する」にチェックが付いていることを確認。
- ③ 動画を再生する。(動画の遅延が激しい場合、自分のカメラをオフにする。)
- ④ 共有を終了する。(動画のタブで「中止」、または Meet のタブで「画面共有を停止」)

Windows でステレオミキサー機能を搭載した PC であれば DVD や動画ファイルなどの映像・音声を Google Meet で共有できる。Google Meet ではマイク以外の PC 音源はタブの共有で再生できるようになっているが、PC のサウンド入力設定をステレオミキサーに変更し、Google Meet のマイク設定も同様にステレオミキサーに変更。再生ソフトのウィンドウのみ共有することで映像と音声を再生することができる。

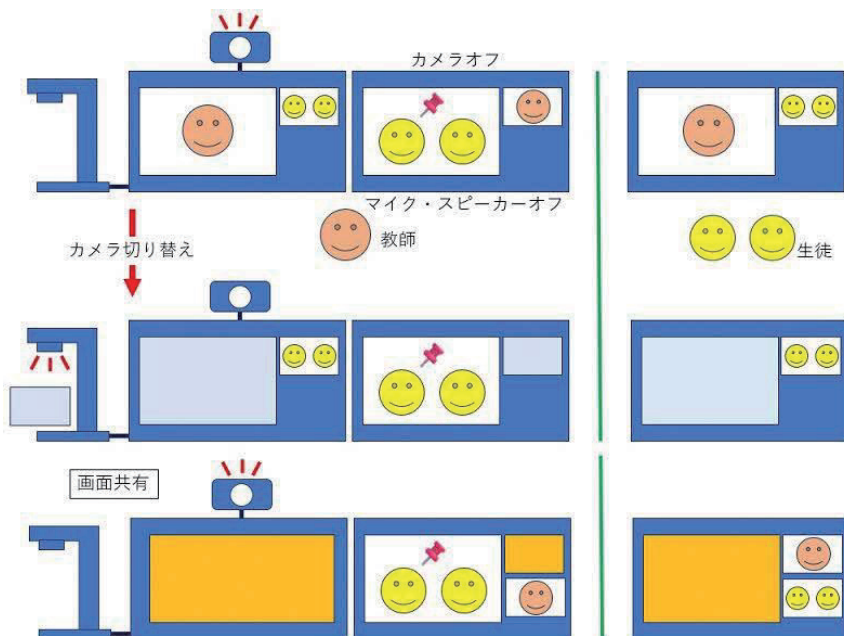
DVD 映像を共有したい場合は、PC に取り込み、MP4 などの動画ファイルとして保存し、クロームタブで再生するのが良い。

Google Meet でグループワーク

Google Meet 起動→「次回以降の会議を作成」→URL 生成。これをスプレッドシートなどにコピー&ペーストを班の数だけ繰り返し、(リンクの有効期限は最後に使用してから 365 日) URL リストを生徒と共有。それぞれのグループに入ってもらいグループワークを行う。教師は全体と全グループの会議をタブで分けて表示し、巡回する。

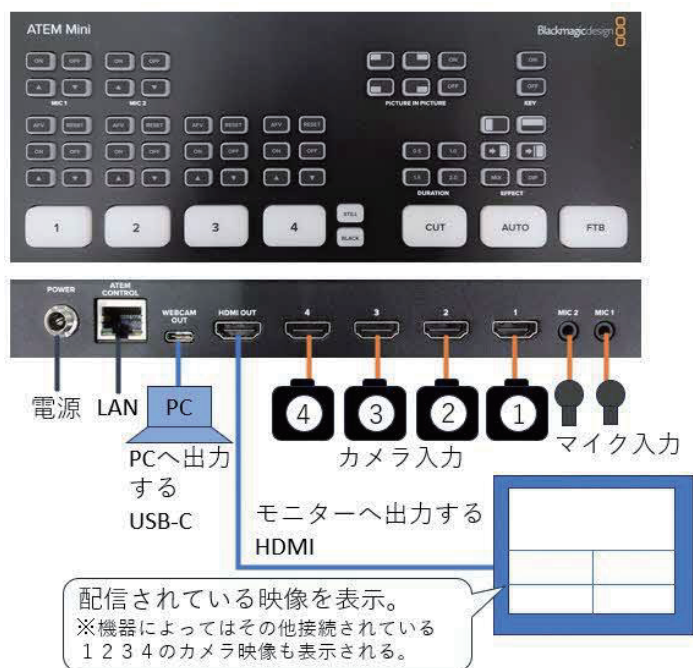
機器使用例

「画面共有をすると生徒の様子を確認しにくい」→端末を2台使用すると便利。サブ端末はマイク、スピーカーをオフにする。カメラも必要なければオフ。広い角度を映せるカメラがない場合、2台のカメラを切り替える等。



スイッチャーを使用するとカメラの切り替えが簡単

例：スイッチャー「ATEM Mini」



USB-C ケーブル 1 本で 4 つのカメラ映像を PC に出力することが出来る。

1234 のボタンでカメラを切り替える。

HDMI OUT から、配信されているカメラ映像をモニターに映すことが出来る。

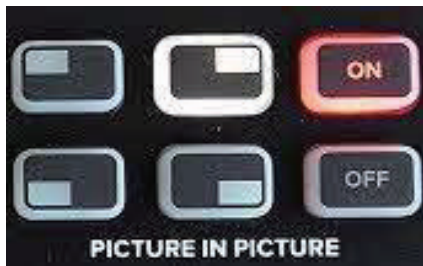
※機器によってはすべてのカメラ映像が表示されるマルチモニターを使用できる。(ATEM Mini Pro 等)



マイク「ON」で使用。
「▲」「▼」で音量調整。



カメラのマイクを使用する場合（例：カメラ1）
カメラ1の番号の上にある「ON」のボタンを押し、赤く光っているとカメラ1の音が有効になっている。
「AFV」…「オーディオフォロービデオ」をONにすると、映像の切り替えと同時に音声も切り替えることができる。音声を切り替えたくない場合は「AFV」ではなく「ON」にしておく。
「▲」「▼」で音量調整。「RESET」でリセット。



ピクチャーインピクチャー



「ON」にするとデフォルトではカメラ1の映像がピクチャーインピクチャーされる。



カメラ切り替え
初期状態は「CUT」
エフェクトを加えて切り替えたい場合「AUTO」にする。
切り替える秒数は「0.5」「1.0」「1.5」「2.0」選択出来る。
使用したいエフェクトを選択する。

(2) 令和7年度に実施した科目の概要について

・数学B

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の双方向授業。令和4年度から実施。

・実践文系数学

小国高校において、習熟度別指導を展開する中で、難関大学進学志望者を対象に開設。第一高校から配信。配信側の第一高校にも生徒がおり、本県における遠隔授業の中でも最大規模の双方向授業。令和6年度から実施。

・マーケティング

小国高校のある小国町は県内屈指の温泉所でもあり、生徒も観光・サービス業を身近に感じており、経営に興味・関心を持つ生徒のニーズに応じる形で実施。小国高校には商業の専門教員がいないため、球磨中央高校のSTによる配信。令和4年度から実施。

・発展英語

難関大学進学志望者に向けた、STによる発展系の科目。受信側の生徒のニーズに応じるため、高い専門性を持つ八代高校のSTに授業を依頼した。本県のネットワーク構成校以外の学校から、受信側にのみ生徒がいる状態で配信している。令和5年度から実施。

・情報探究

牛深高校において、選択科目として今年度より開設した。近い将来の配信センター設置を念頭に、県立教育センターから受信側にのみ生徒がいる状態で配信している。授業者は県立教育センター近隣の鹿本高校から、配信授業が実施される都度教員を派遣する形をとった。

○各校における遠隔授業の様子

※記録上、同一科目の説明が配信校、受信校いずれか一方にまとめてある場合がある。

【熊本県立第一高校】配信（数学B、実践文系数学）

3年生の数学を小国高校へ配信

科目：数学B・実践文系数学
教師：西嶋一
第一高校生徒：37名
小国高校生徒：3名

数学B（週2）

記述演習。生徒が板書、解説を行う。

実践文系数学（週3）

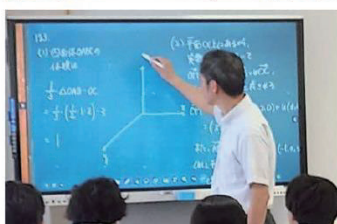
共通テスト演習。

前半問題を解き、後半教師が解説。



双方向による学び

第一高校と小国高校の両生徒がそれぞれ解説を行うことで向学心を高め、刺激し合うことができた。



電子黒板の利用（小国高校の板書を電子黒板に表示）
小国高校の板書に対して教師が直接解説を書き込めるようになり、両校の生徒が視覚的に理解しやすくなった。

小国高校での対面授業



年2回、教員が小国高校へ訪問し、対面授業を行った。

普段はカメラ越しだが、机間指導で生徒の様子をより良く理解できた。

遠隔授業についての困り感や要望等の意見を聞くことが出来、改善につながった。

対面授業においては、習熟度別のクラスで普段遠隔授業を受講していない生徒も一緒に受講した。

第一高校から小国高校へ配信される数学 B 及び実践文系数学の 2 科目については、配信側の 37 名と受信側の 3 名の生徒が同じ時間にオンタイムで行う合同型授業である。メインカメラの他にサブカメラを用いることで、2 校の生徒がまるで同じ教室にいるかのような距離感で授業を行うことが可能となる。人数の多い配信側主体となりがちな合同型授業であるが、授業担当者は、同時双方型による深い学びを重視し、小国高校の生徒が自分の解答を解説する活動なども授業に取り入れた。多様な生徒との協働的な学びにより、数学的思考力を深めることが期待される。また、生徒の問題に対するアプローチを生徒の手元をアップにして見取るなど丁寧な指導を心掛けた。

【熊本県立小国高校】受信 (数学 B、実践文系数学、マーケティング、発展英語)

<p>実際の授業 (実践文系数学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 受信校の生徒が自分の解答を解説 ② 授業者が配信校の生徒の解答を補足 ③ 授業者は配信校の生徒の問題に対するアプローチを、手元をアップして見取ることもある 	<p>配信授業の様子</p>  
<p>スクーリングの様子</p> 	

<p>実際の授業 (マーケティング)</p> <p>配信授業の様子</p>	<p>スクーリングの様子 小国高校側から球磨中央高校に配信</p> 
---	---

小国高校は、2つの高校と1人のスーパーティーチャーから4つの科目を受信した。遠隔授業を受講する小国高校の生徒は、国公立大学や難関大学への進学を志望するなど、学習に対する意欲が高い。熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業における遠隔授業の実施は、小規模校における生徒の多様なニーズに応じ、進路実現を図ることが目的の一つであり、自分の進路を実現させる過程で、他校の生徒と切磋琢磨できる環境を創り出したことは大きな成果であると考えている。

○CORE ハイスクール・ネットワーク事業をとおしての小国高校の感じる成果について

- ・小国高校だけでは感じるできない大学進学に向けた意識・学習意欲の向上
- ・難関大学に向けた受験対策等のノウハウの共有
- ・職員間交流による指導方法の共有及び指導力向上
- ・生徒の興味・関心や進路志望に応じた教科・科目の選択肢の拡幅
- ・商業科目選択による、探究活動や進路指導との関連付け及び資格取得

○遠隔授業を受講した生徒の感想

- ・第一高校の皆さんと一緒に授業を受けることで一緒に頑張る仲間が増え、モチベーションを高めることができた。
- ・配信担当の先生から解法を別画面で添削してもらえたり、スクーリングの際に丁寧なご指導をしていただき、配信授業の難しさを工夫して乗り越えようとしていただいたことに感謝しています。
- ・商業を専門的に学んでいる生徒の専門性の高さを感じて刺激になった。

【熊本県立牛深高校】受信（情報探究）



牛深高校は、県立教育センターから情報探究の科目を受信した。教室前方にモニタを配置し、生徒全員の顔が見える配置での遠隔授業であった。

○遠隔授業を受講した生徒の様子

- ・普段の授業から前向きに取り組む生徒たちだが、遠隔授業であっても同じように取り組めた。
- ・はっきり答えたり、手で数字を示しながら答えたりなど、遠隔授業に生徒たちが順応してきていると感じた。
- ・クラスルームを通じて質問することで、週1度の授業以上のフォローをしてもらい充実したものとなった。

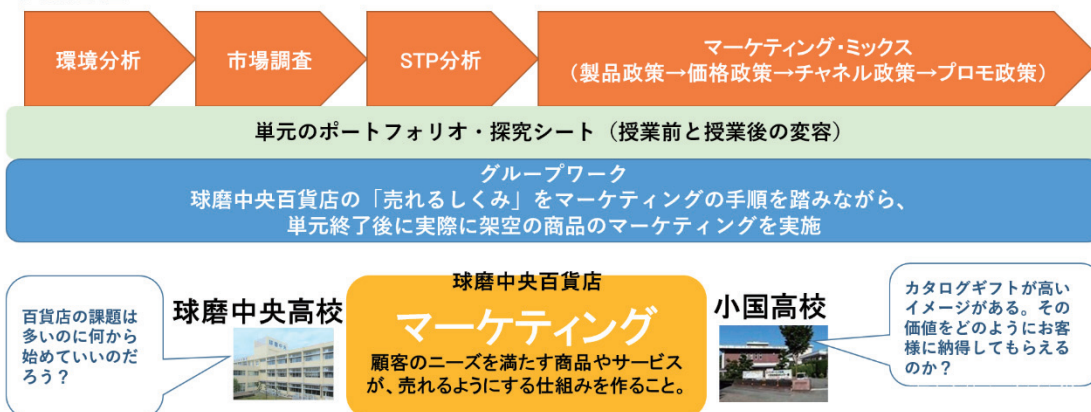
【熊本県立球磨中央高校】配信（マーケティング）

球磨中央高校は今年度、小国高校にマーケティングの授業を配信した。

従来の架空店舗を想定したシミュレーション学習から脱却し、本校独自の教育資産である「球磨中央百貨店」を具体的なマーケティングフィールドとして遠隔授業に導入した。実社会に存在するリアルな活動を配信・受信両校共通の探究課題として設定することで、生徒が強い当事者意識を持ってペルソナ設定や販売戦略の立案に挑むなど、地域を跨いだ「生きた学び」の場を創出することができた。

球磨中央高校で行っている「遠隔授業」について

学習過程



- 利点① 共通の地理的環境のため、地域資源を活かした商品・サービスについてのマーケティングが実践できる
利点② 考えやアイデアを共有するワークを多く取り入れ、協働的な活動の場面を設定できる

球磨中央高校で行っている「遠隔授業」について

学習活動の工夫

- ① 学習内容はすべてスライドで表示
 - Googlemeetを使用し、画面を共有
 - 各単元の初めに、スライドノート、探究シート、ポートフォリオを配付
- ② スプレッドシートを使って意見を集約
 - 発言が苦手な生徒にも積極的に意見を出すように促す
 - どの意見が多いかをグラフで表し、その後のマーケティングの実践に活かすことができる
- ③ 年に2回は受信先から配信授業を行う
 - 配信校の生徒が受信校の状況を知り、効果や課題を考えてもらう
 - 受信校の生徒から「もっとこうしてほしい」など、要望を聞く
- ④ 共通のテーマ「球磨中央百貨店」の課題を共有
 - 生徒だけでなく、教師側の課題も共有する必要

授業の様子

(画面を見て、スライドノートに記入する)



意見集約シート

(「お客様の声に耳を傾けすぎずはいけない理由」という問いに、自由に意見を入力)

27	まだお客様の声が聞き取れないから
28	すぐ飽きてしまったから、聞きすぎると飽きてくるから
29	みんなが意見を出さなければいいから
30	授業の進行が速いから聞き取れないから
31	聞き取れないから
32	聞き取れないから
33	聞き取れないから
34	聞き取れないから
35	聞き取れないから
36	聞き取れないから
37	聞き取れないから
38	聞き取れないから
39	聞き取れないから
40	聞き取れないから
41	聞き取れないから
42	聞き取れないから
43	聞き取れないから
44	聞き取れないから
45	聞き取れないから
46	聞き取れないから
47	聞き取れないから
48	聞き取れないから
49	聞き取れないから
50	聞き取れないから

球磨中央高校で行っている「遠隔授業」について

学習活動の工夫

④ グループワーク

- Padlet、Figjamなどを活用し、グループワークを行う
- 球磨中央・小国のグループ、学校別のグループを組む
 - ※常に同じグループでもよいが、定期的に変更し様々なメンバーと交流できるようにする
- 教師側は進捗状況を確認し、アドバイス等を行う

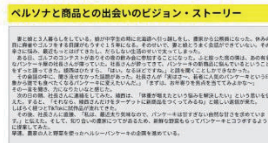
グループワークの様子



受信校の生徒のアイデアを確認している様子

⑤ 課題の提出

- 探究シート、ポートフォリオは単元終了後、提出(各学校)
- 上記以外の課題についてはスライドで提出
 - ※例 商品アイデアを示したスライド
 - ペルソナマーケティング(ビジョンストーリー) など、生徒が提出しやすい「自由度の高い課題」を設定



ペルソナマーケティングのビジョンストーリーの作成



球磨中央高校で行っている「遠隔授業」について

遠隔授業の課題と対策

- ① 学習評価の算定方法
 - 学校間で評価規準が異なる→評価材料を統一する

知識・技術 (40点)	思考・判断・表現 (35点)	主体性 (25点)
定期考査(期末考査のみ) 単元用語確認テスト ポートフォリオ	定期考査(記述) 探究シート 課題スライド グループワーク	探究シート(振り返り) グループワーク 意見集約シート

- ② 学年、学科の違いによる知識等の差
 - オリエンテーションの時間を設ける(受信校の困りごとを聞き、改善)
 - 配信・受信のみに偏らない説明、事例を工夫
 - 本校のみで実施している授業評価を小国高校の生徒にも実施(学期ごと)
- ③ 対話型授業における伝わり方
 - 球磨中央・小国の生徒によるグループワークでは、対話が聞き取れない場面もある→chat機能の活用
 - 常に「受信側に授業をしている」ことを意識し、ゆっくり大きな声で、繰り返し説明をする
- ④ カリキュラム・マネジメントの位置づけ
 - 球磨中央百貨店など、学校行事の位置づけとして捉えるのではなく、年間を通じたカリキュラム・マネジメントの中に取り込む
- ⑤ 他県の取り組みを参考に(12月に長崎県遠隔教育センター視察)

(3) 成果発表会（公開授業）について

今年度は現在取り組んでいる小規模校の学びの充実を目的とした教科・科目充実型の遠隔授業について、県内全域に遠隔授業の普及・促進を図り、もって高等学校教育の充実を図るため公開授業を開催した。

今回は実際の遠隔授業のイメージを持ってもらうことを主眼として、授業者が遠隔授業を行っている様子、受信側の生徒が受講している様子をオンラインで公開した。

実施校	県立牛深高等学校（受信）	県立教育センター（配信）
実施日時	令和7年11月14日（金）	
該当科目	情報探究（第3学年）	
参加者	・ 県立学校関係者 13名 ・ 県教育委員会関係者 2名	
内容	オンライン開催：公開授業見学、事業内容説明、質疑応答	

【牛深高校での公開授業の様子】



公開授業後には本事業内容の説明及び質疑応答の時間を設けた。質疑応答では遠隔授業での授業者と受講者のやり取りや、実際に使用している

機器に関する質疑応答があった。今後の熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業の展開に関する事など多岐にわたった。

今後も継続して、県内の多くの教員にこの取組を周知していかなければならないと感じた。

【参加者の感想】

- ・今回の公開授業を参観して、実際に遠隔地に出向いて授業を行う労力と時間、費用を考えるとオンデマンドよりも十分な教育効果はあると思いました。ここ2, 3年を考えても機材等が進化して使いやすくなっていると感じました。
- ・遠隔授業を担当しています。遠隔ではなかなか難しい、コミュニケーションをしっかりと取られていたことがとても印象的でした。見習っていきたいです。
- ・今後、本県で事業を拡大していかれるとのことですが、教員の人数が足りない中で、単位数の少ない授業を展開するには大変良い取り組みだと思ふ反面、生徒のノートや画面が見えない等の対面には及ばない点、学校ごとに異なる基準の成績付けの負担が大きい点など、在籍校とは同等にいかないことを理解頂いた上での配信が必要かと思っています。
- ・特に人口減少エリアにおける教員不足が叫ばれる中、喫緊の課題かと思ひ参加させていただきました。遠隔授業では生徒とのやり取りに随分制約が出るのではと心配していましたが、思いのほか双方向性が確保された形で授業ができていたように感じました。とは言え、受講者側が少人数クラスであることが現時点では授業成立に大きく寄与している側面もあるのかな、という印象も受けました。
- ・対面授業よりも不具合はあると思うが、学校の状況に合わせて取り入れることで生徒の学びの機会を保障できると感じた。